平成２５年度病害虫発生予察指導情報

対象病害虫：ブドウべと病・白腐病

平成２５年６月２６日
鳥取県病害虫防除所

指導情報の概要

６月下旬現在、県下全域のブドウにべと病及び白腐病の発生がやや多くなっている。今後、梅雨期間中の連続降雨による発病の増加が予想されるため、防除を徹底する必要がある。

病害虫名：ブドウべと病・白腐病

１　**対象作物**　ブドウ
２　**品種**　べと病：青ブドウ系品種（ロザリオビアンコなど）
　　白腐病：デラウェア、青ブドウ系品種（ロザリオビアンコなど）
３　**発生地域**　県下全域
４　**発 生 量**　やや多い

５　**情報の根拠**

（１）現地ほ場におけるブドウべと病及び白腐病の発生量は、６月中～下旬の降雨により好適な条件が続いたため、ハウスの谷部を中心にやや多く推移している。
（２）気象予報の１か月予報（６月２１日付）によると、平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されており、今後も感染拡大が予想される。

６　**防除上注意すべき事項**

（１）発病した葉や果実は伝染源となるため、できるだけ取り除き、園外に持ち出し処分する。
（２）誘引や摘心等により、風通しのよい樹形にする。
（３）薬剤の散布は、園の周辺部や枝葉が混み合ったところなどにかけむらがでないように丁寧に散布する。特にハウス栽培では、谷間やビニールのつなぎ目の、雨水の流れ込む部位に発病が多いことから防除の際はこの部分の防除を徹底する。
（４）べと病の薬剤は、表１の基準に従って使用する。使用の際は、同一分類に属する薬剤の連用を避ける。なお、ホライズンドライフロアブル及びベトファイター顆粒水和剤は、同一成分（シモキサニル）を含むため、可能な限り連用は避けることとする。
（５）表１の薬剤はすべて予防効果及び治療効果を有するが、病害が多発生となってからの散布では十分な効果が得られないため、予防を徹底する。
（６）白腐病の薬剤は、表２の基準に従って使用する。
（７）薬剤を使用する際は、果実の果粉溶脱及び使用時期に注意して使用する。

7　薬剤を選ぶ際の注意点

（１）QoI 剤は特にべと病の耐性菌が発達しやすいことから、晩腐病などの同時防除の場面で使用し、QoI 剤の使用回数は年１～２回に抑えるように注意する。べと病のみを追加防除する場合は QoI 剤を使用しない。

（２）べと病及び白腐病に対して同時防除が可能な薬剤はない。上記２病害が問題となっている場合は、各病害に対して有効な薬剤を１剤ずつ選び混用散布する。

（３）殺菌剤の２種混用については表３を参考にする。

表１　主な殺菌剤（ブドウべと病対象）の使用基準

分類	商品名	希釈倍数	使用時期	使用回数
QoI （Qo阻害剤）	**アミスター10フロアブル**	1000倍	30日前	3回以内
	ストロビードライフロアブル	2,000～3,000倍	14日前	3回以内
	ホライズンドライフロアブル	2,500～5,000倍	21日前	3回以内
CAA （カルボン酸アミド）	フェスティバル水和剤	2,000倍	30日前（大粒種） 60日前（小粒種）	2回以内
	ベトファイター顆粒水和剤	2,000～3,000倍	30日前	3回以内
	レーバスフロアブル	2,000～3,000倍	7日前	3回以内
QiI※[2] （Qi阻害剤）	オラクル顆粒水和剤	5,000～10,000倍	14日前	3回以内
	ライメイフロアブル	3,000～4,000倍	14日前	3回以内
	ランマンフロアブル	1,000～2,000倍	14日前	3回以内

（注）
1. 表中の太字はブドウ県暦に記載されている薬剤。
2. QiI剤の有効成分であるアミスルブロム（オラクル顆粒水和剤及びライメイフロアブルの有効成分）及びシアゾファミド（ランマンフロアブルの有効成分）間の交差耐性については未報告

表２　主な殺菌剤（ブドウ白腐病対象）の使用基準

商品名	希釈倍数	使用時期	使用回数
パスワード顆粒水和剤	1000倍	14日前まで	2回以内
ロブラール水和剤	1,000～1,500倍	開花期～収穫期 但し、収穫60日前まで	3回以内

表３　ぶどう農薬混用事例（殺菌剤×殺菌剤）

	パスワード顆粒水和剤	ロブラール水和剤
アミスター10フロアブル		
ストロビードライフロアブル		○
ホライズンドライフロアブル		○
フェスティバル水和剤		
ベトファイター顆粒水和剤		
レーバスフロアブル		
オラクル顆粒水和剤		
ライメイフロアブル	○	○
ランマンフロアブル	○	○

（注）「○」は混用事例があり、問題がなかったもの　　資料：クミアイ農薬総覧2013
空欄は混用事例なし